二〇一八年度　桐朋女子中学校入学試験　（B入試）

筆記試験（国語）

受験番号

氏　　名

【注　意】

一、問題冊子が配られても、開いてはいけません。

二、問題冊子は1ページから17ページまであります。

三、「はじめなさい」と言われたら、まず、問題冊子の表紙と解答用紙二枚に、それぞれ受験番号と氏名を書きなさい。

四、答えは、すべて解答用紙に書きなさい。

五、問題冊子に書きこみをしてもかまいません。

六、「やめなさい」と言われたら、すぐに筆記用具をおき、解答用紙も問題冊子も表を上にして、机の上におきなさい。

七、試験時間は四十五分です。

一、次の①～⑩の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。送りがなが必要な場合は送りがなもつけなさい。また⑪～⑮の――線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

① 卵がワレル
② 友達をショウタイする
③ いだいなコウセキを残す
④ 私は父に二ている
⑤ ノウゼイの義務
⑥ ヤサシイ問題から解く
⑦ 情報をテイキョウする
⑧ ゴミをヒロウ
⑨ 手紙がトドク
⑩ 日本列島をジュウダンする
⑪ 圧巻の演技
⑫ 筋を通す
⑬ 卒業証書を授与する
⑭ つり糸を垂らす
⑮ 時計の短針

二、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 次の①～⑤のそれぞれの――線部の主語を記号で答えなさい。

① 彼女こそ　努力家と　呼ぶのに　ふさわしい　人物だ。
ア　イ　ウ　エ

② 今年は　結局　その　花は　さかなかった。
ア　イ　ウ　エ

③ 雨が　強く、風も　とても　激しい。
ア　イ　ウ　エ

④ 私は　あの　映画が　一番　面白いと　思った。
ア　イ　ウ　エ

⑤ 太一は、花子が　歌っている　姿が　好きだ。
ア　イ　ウ　エ

(2) 次の①～⑤のそれぞれの――線部を修飾(しゅうしょく)している語をすべて選び、記号で答えなさい。

① 風が　激しく　ふき、雨も　強く　打ちつけた。
　ア　イ　ウ　エ

② 真っ赤な　あまい　イチゴを　おいしそうに　パクリと　食べた。
　ア　イ　ウ　エ

③ ヘトヘトに　つかれた　私は、朝まで　ぐっすり　ねむった。
　ア　イ　ウ　エ

④ たくさんの　人を　乗せた　電車が　毎日　走っている。
　ア　イ　ウ　エ

⑤ 友達が　私に　旅先で　買った　おみやげを　くれた。
　ア　イ　ウ　エ

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数制限のある問いに答える場合、「　、」や「　。」も一字と数えます。問題文には、原文の一部を省略したところがあります。

文化の伝達において、語り伝えるということは、普通(ふつう)の会話のように形式を持たない場合もありますが、一定の形式を伴(ともな)った形、A 簡単で、言いやすく、記憶(きおく)しやすいという形で伝えられてきたものも数多くあります。その代表的な例が「ことわざ」です。ことわざは一定の形を備え、それをそのまま伝えてきているために、時代の変化に即応(*そくおう)して変化することがあまりないということもあります。すなわち、時代が変わると、生活文化が変わってしまい、そのことわざが言わんとすることが分からなくなってしまうという例が出てくるということです。B、現代においては、ことわざを、親や周りの人びと、友達から耳で聞いて育つという機会は少なくなり、むしろ、本などを通して勉強する場合が多くなっています。知識としては知

っていても、実際に使うことはないのが普通です。残念ながら、生命を失ったことわざが増えているのかもしれません。

C、食べ物が出てくることわざで言えば、「絵に描いた餅」、「臍で茶を沸かす」、などは良く知られたものですが、こうした例ですら若い世代には通じない時代です。「芋の煮えたも御存じない」（世間知らずで常識がない。育ちがよくて、のんびりとしたお坊ちゃん、お嬢ちゃんをからかうときに言う）などと言ってみても、おそらく「？？？」という反応が返ってくるだけでしょう。また、昔は「食べてすぐ寝ると牛になる」と、親からよく言われたものでした。食事をして、すぐにごろんと横になるのは、怠けていてだらしないと、行儀をたしなめて言ったものです。しかし、今では、こうしたことわざに、「食後すぐに動くより、少し休んだ方が胃腸の働きに良い」と、医学的な説明などを加えながら、反論する人も少なくないでしょう。ことわざを文字通りに解釈して、①それを科学的に批判するので、「そんなのは迷信」ですましてしまうことになるのです。それどころか、会社の上司が「早飯早糞芸のうち」などと新入社員に言ったならば、イジメだ、などと言われかねません。

とはいえ、ことわざの一部は、現代においても、わたしたちの行動を制約したり、戒めたり、時には励ましたりする力を持っています。「ことわざ」の一部には、「鰻に梅干し」や「土用の丑に鰻」のように、よく知られてはいますが、明らかに科学的根拠は不明であると言えるものもあります。D、現在でも、これらを実践している人は少なくないのではないでしょうか。「鰯の頭も信心から」とは言いませんが、いったん信じて受け入れてしまえば、ことわざ

の教えは、知らず知らずのうちに、わたしたちの行動の規範*として働くのです。

視点を変えてみれば、食べ物に関することわざは、人生の生き方をも教えてくれます。「芋でも頭になれ」とは、芋のような取るに足らないものでも、頭と名がつけば、それなりに意義がある。大きな組織で人に使われるより、小さな組織でも人の上に立つ人間になれという教えを言ったものです。また、「憂いも辛いも食うての上」とは、日々の食事にも事欠くような生活では、苦しいだの辛いだのといった不平不満は言ってはいられないということですが、現代日本の生活を考えさせることわざではないでしょうか。

（中略）

一つ気がかりなのは、②現代は、ことわざがかつて見られなかったほど急速な勢いで消えてゆく時代でもあるということです。それは、世代を超えた「語り伝えの文化」が失われてゆくことと直結しています。近年の電子情報機器の使用によることばの伝達機能の飛躍的な発達によって、人びとは語り継がれることわざのようなものよりは、マスメディアを通じて送り込まれる情報に強い影響を受けるようになったからです。こうした情報伝達の急激な変化は、ことわざを消したというだけでなく、社会における人間の関係のあり方や生活形態そのものを根底的に変えてしまったのでしょう。

ただ、ことわざが失われつつあると言うと、ことわざも日本の文化だ、子どもたちには勉強させるべきだ、という発想に結びつきがちです。確かに、文化を大切にする気持ち自体は良い③ことですが、実際には、子どもたちは教室でことわざの文字の部分と意味だけ覚えて、それで

終わりとなってしまうことになりかねません。しかし、本来、ことわざは、人びとの生活の中で、人と人とが生身で関わる語り伝えの文化の中でこそ、生きているものです。もし、ことわざを大切にと考えるならば、それを支えている「語り伝えの文化」そのものを見直してゆくことが必要でしょう。

近年、携帯電話やインターネットを使ったメールなどが、人びとの間でコミュニケーションの新しい道具として幅を利かせるようになりました。これは一見、便利になったようですが、逆に見れば、人間がお互いに生のことばで直接に伝え合う機会がだんだんと失われているということでもあるのです。こうした状況は、食べ物をめぐることわざの世界にも大きな影響をもたらしています。たとえば、メールのような文字のコミュニケーションで使えば、ことばの意味が伝わるかどうかだけが問題となります。そうした時代であるからこそ、食べ物のことわざについても、字面を追うだけでなく、それが、どういった状況で、どのような関係の人びとの間で、どういった口調で、どういった思いを持って使われてきたのかに、思いを馳せるゆとりが必要なように思うのです。

（西江雅之『食べる　増補新版』青土社）

＊即応　――――　すぐさま対応すること。

＊規範　――――　従わなければならない行動などの型。

問い一、本文中の□A～Dに当てはまる言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア　しかし　　イ　さらに　　ウ　すなわち　　エ　たとえば

問い二、═══ 線部Ⅰ「たしなめて」・Ⅱ「幅を利かせる」・Ⅲ「字面を追う」のここでの意味として最も適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「たしなめて」

ア おだやかに注意して
イ ばかにして
ウ きびしくしかって
エ 説明して

Ⅱ「幅を利かせる」

ア すっかり定着している
イ ますます便利になる
ウ いっそう注目される
エ とても多く用いられる

Ⅲ「字面を追う」

ア ことわざの文字の部分と表面的な意味を覚える
イ ことわざが科学的に正しいかどうかを追究する
ウ ことわざが文章のどこで使われているかを確認する
エ ことわざに使われている言葉の意味を辞書で調べる

問い三、═══ 線部①「それを科学的に批判する」とありますが、

(1) 「食べてすぐ寝ると牛になる」についてどのように批判するのですか。次の文章の【　】A・Bに当てはまる表現を、Aは十五字以内、Bは二十字以内でそれぞれ答えなさい。

【　A　】。なぜならば【　B　】からだ。

(2) 「食べてすぐ寝ると牛になる」ということわざが本来伝えようとしていたのはどういうことですか。説明しなさい。

問い四、═══ 線部②「現代は、ことわざがかつて見られなかったほど急速な勢いで消えてゆく時代でもある」とありますが、原因として情報伝達の方法が変化したということが挙げられます。情報伝達の方法は、どのように変化したのですか。昔と今のちがいがわかるように、五十字以内で述べなさい。

問い五、――線部③「それで終わり」とありますが、

(1) 「終わり」とはどういうことですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア テストでことわざの意味が答えられるかどうかが、ことわざの勉強のすべてだと確信すること。

イ 文字の部分や意味を暗記しても、ことわざ本来の行動を制約したり、戒めたり、励ましたりする力を実感できないままであるということ。

ウ ことわざの意味を教室でいくら正確に覚えたところで、そのことわざの存在をすぐに忘れてしまうということ。

エ 一生懸命勉強しても、現代の生活では何の役にも立たないものだと決めつけて、ことわざを軽く見てしまうということ。

(2) そのようにして身につけたことわざを、筆者は何と表現していますか。本文中から十字以内で探し、ぬき出して答えなさい。

問い六、筆者は、ことわざのどのようなところに価値があると考えていますか。次の中から適切なものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア 生活文化をわかりやすく覚えやすい形で伝えている点

イ 人間がお互いに生の言葉で直接伝え合ってきたものである点

ウ 生活のしかたが変化しても昔と同じように理解できる点

エ しっかりとした科学的な根拠が必ず備わっている点

オ どのように行動すべきかということを教えてくれる点

問い七、――線部④「それが、どういった状況で、どのような関係の人びとの間で、どういった口調で、どういった思いを持って使われてきたのかに、思いを馳せるゆとりが必要なように思うのです」とありますが、今まで生活してきたなかで、身近な人がことわざを教えてくれたことがあることでしょう。どのような場面で、どのような関係の人が、どのような思いを持ってそれを教えてくれたのですか。教えてもらったことわざをはじめに挙げてから述べなさい。ことわざは食べ物に関するものでなくてもかまいません。

四、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数制限のある問いに答える場合、「　、」や「　。」も一字と数えます。

広瀬（ひろせ）くんは、佐々野（ささの）さんたちのクラスにやってきた転校生です。ある日、広瀬くんが以前入っていたサッカークラブの下級生を城跡（しろあと）の高台から突（つ）き落としたというううわさが流れ、広瀬くんは学校を休むようになってしまいました。佐々野さんは、広瀬くんの悪口を言う岸本くんたちと一緒（いっしょ）に事件のあった城跡へ、うわさが本当かどうかを確かめに行きました。本文は、それに続く場面です。

昼過ぎ、駅前のバス停で降りたわたしたちは、そのまま広瀬くんの家に向かった。急すぎるかもと思いはしたけど、

「ぜったい、今日中に、はっきりさせようぜ。」

①岸本くんや戸田くんがそういいだし、わたしも決心した。玄関（げんかん）のチャイムを鳴らし、インターホンごしに、広瀬くんに話があって来たことを伝えた。やがて、玄関のドアが開き、外に出

てきた広瀬くんは、玄関先に集まっているわたしたちを見て驚いた表情をうかべた。
「ほら、佐々野。おまえ、もう一回話せよ。」
みんなの後ろにいたわたしを岸本くんが呼んだ。
「香菜ちゃん、がんばって。大丈夫だって。みんなついてるから。」
「そうそう。さっきみたいに！」
真理子ちゃんと梨花ちゃんが、応援してくれた。覚悟を決め、わたしはみんなの前に出た。深呼吸して気持ちを静めた。そして、暗い目をしている広瀬くんに向かってゆっくりと話しはじめた。
「あの……ごめんね、広瀬くん。みんなで……いっぱい、かげぐちとか、悪口いっちゃって……。」
「ああ、なんだそのことか。そんなの気にしてないよ。」
広瀬くんは後ろにいるみんなのほうにも目を走らせ、気楽な感じでいった。
「前の学校の話はさ、あれ全部本当だし、みんながいろいろいいたくなるのも当たり前だから。心配いらないって、もうずる休みはやめにして、来週からはちゃんと学校に行くからさ……。」
「違うよね……。本当じゃないよね……広瀬くん、うそいってるよね。だって、男の子を突き落としてなんかいないんだから。」
「そんなことないって、おれがやったんだって。」
そして、広瀬くんは自分がしたことをみんなの前で話しだした。広瀬くんが入っていたサッ

カーチームのこと。そこにいた年下のチームメートのこと……。運動公園であった練習試合。そのチームメートのミスで負けてしまい、ひどく腹を立てたこと。その後で、広瀬くんが城跡の高台へとその子を連れだしたこと……。最初は、ちょっと脅かすくらいだったけど、ついエスカレートしてその子の背中を押してしまった。突き落としてしまった……。

「足のケガはそうたいしたことなかった。でも、そいつ、ショックを受けてサッカーチームをやめてしまったんだ……。それもこれも、全部おれのせいなんだよ。」

聞いているだけで胸がつまりそうになった。けれど、広瀬くんは表情も変えずに、淡々と話し続けた。

「結局、おれも、あれこれいわれてサッカーチームをやめた。自業自得って感じかな……。それで転校してからは、以前のことはないしょにしておこうと思った。でも、やっぱり世の中はそんなに甘くないっていうか……。悪いことをしでかしたら、当たり前のようにずっとついて回るんだよな。」

広瀬くんは自分の足もとをじっと見ていた。転校して、はじめて教室にやってきたあの朝みたいに……。

「でもやっぱり、広瀬くん……うそついているよね。かばおうとしているんだよね……その男の子のことを……。」

「違うって、そんなわけ……。」

わたしは広瀬くんのことばをさえぎった。今はもう遠慮なんかしてちゃだめだ。なんとして

でもわたしたちの気持ちを伝えなくちゃいけない。
「男の子が落ちたとき……。物音を聞いた公園管理のおじさんが……駆けつけたんだよね。それでそこにいた広瀬くんが、自分が突き落としたっていったんだよね。でも、そんなの……無理だよ。できるわけないよ……。」②
「えっ？」
少しあわてた様子で広瀬くんはわたしを見た。
「公園管理のおじさんがいってたよ。男の子が落ちた場所のすぐ近くを歩いていたって……。だから、おじさんが物音を聞いて駆けつけるまで、たぶん一分もなかったと思う。でも……そこにはもう広瀬くんがいたんだよね……。青ざめた顔で立ちつくしていたんだよね……。それ、おかしいもん……。城跡の高台で突き落とした広瀬くんが、どうして、そんなにはやく下に降りてこられたの……？」
「それは、そのおじさんの勘違いかなにか……。」
「ちゃうよ！」
元気な亜沙美ちゃんの声が、わたしのすぐ横から響いた。
「うち、ちゃんと聞いたんだからね。それだけじゃないよ。香菜ちゃんがいいだして、もう一度、ちゃんとみんなで話を聞きにいったんだから。勘違いとか、そんなのぜんぜんあらへん。それに、香菜ちゃんが尋ねたら、おじさんいってた。広瀬くんの息はぜんぜん乱れてなかったって。青ざめて、泣きそうになってただけだって。」

「うそじゃないって。おれ、一気に城跡から駆けおりたんだって。近道があって。」
もういいのに……。③それでも広瀬くんはしつこくいい続けた。
「ふざけんな広瀬。そんなことできるかっての！」
後ろから飛びでてきた岸本くんが、がまんできないという感じで広瀬くんをにらんだ。
「おれたち、実験したんだからな。佐々野に頼まれて、高台のとこから下の草地まで必死になって駆けおりたんだからな。おれたちがどんなにがんばっても、あんなくねくね道、たどりつくまで三分以上はかかったぞ。それに、下に降りたときはもうへとへとで、息なんかゼーゼーだったんだからな。」
「そうだそうだ！」
戸田くんも飛びだしてきた。
「おれもつきあわされて、走らせられたんだからな。しかも二回もだぞ！　いっとくけど、どこにも近道なんかなかったぞ。」
Ⅲ
広瀬くんが息をのむのがわかった。やっと気づいてくれたのだと思う。わたしたちが、広瀬くんのためにどんなに一生懸命になってたかってことに。④みんなはわたしの無茶な頼みだって、嫌がらずに手伝ってくれた。それはきっと、広瀬くんにはやく元気になってほしいからだ。
「広瀬くん。その男の子は自分で飛びおりたんだよね……。高台にのぼって、柵を乗り越えて……ひとりで飛びおりたんだよね……。」
わたしは思いきっていった。広瀬くんは、それでもわずかに首をふり、なにかをいい返そう

とした。でも、あきらめたのか肩を落とし、じっとわたしを見た。Ⅳ

「やっぱり、佐々野さんはすごいよ。気づいちゃうなんて……。」

つらそうな表情のまま、広瀬くんはそこにいるみんなを見回した。

「お願いだよ、このことは黙っててほしいんだ。あいつにとっては、自分で飛びおりたとかより、おれに突き落とされたってことにしてたほうがいいんだって……。自分のしたことで周りに責められたら、あいつ、ものすごくつらいだろうなあって思うんだ……。」

やっぱりそうだった。広瀬くんは友だちをかばってうそをついていたんだ。自分のことより、その子のことを考えていたんだ。

「勘違いしないでくれよ。おれ、みんなが考えているようないいやつじゃないよ……。おれ、ずっとあいつのことを軽く見てたんだよ。自分のほうが上だって心のどこかでばかにしてたんだよ。」

玄関のドアが開き、お母さんらしい人が顔を出した。けれど、「いいから。」と広瀬くんがうなずいてみせると、お母さんは少し戸惑っていたようだけど、そのままドアを閉めてくれた。

「運動公園での試合が終わったあとで、おれ、負けたのが悔しくてあいつを非難したんだ。おまえが、もっとちゃんとプレーしてくれたら負けなかったって。おまえはサッカーなんて向いてないんだって。けど、それってただの八つ当たりだったんだ……。」

⑤広瀬くんの声は震えていた。

「そのあとで、あいついなくなっちゃって、さがしに行ったら、高台にあいつが立ってるのが

下から見えて……声をかけるまもなかった。あいつ飛びおりたんだ……。」
みんなが息をのむのがわかった。
「おれ、本当はあいつを押していない……。でもさ、考えてみれば、ひどいことといって、あいつを追いつめたのはおれだし、結局、同じようなことをしたんだよ。だから、あいつが飛びおりたのは、おれのせいなんだ……。」
「そんなことない……。ぜったい、そんなことない……。」
強い口調でわたしは否定した。このことだけは、なんとしてでも広瀬くんにわかってほしいと思った。
広瀬くんは自分を強く責めている。だから、その罪の意識から、管理人のおじさんに聞かれたとき、やってもいないことをやったといってしまったのだろう。うそをついてしまったのだろう。そして、そのほうがそのチームメートにとってはいいんだと思いこんで、ずっと、うそをつき通していたのだろう。
「あいつ、自分が飛びおりたって、ちゃんと警察とか自分の親とか、学校の先生たちにも話したんだよ。そういうやつなんだ……。」
やっぱり……。だから、広瀬くんは責められることはなかったんだ。周りの大人たちは本当のことを知っていたんだ。
「おれが突き落としたってうわさが広まったけど、おれはそのままでいいと思ったんだ。こっちに引っ越すことが決まってたし、もうかまわないって思ったんだ。いまさら本当のことをいって、あいつを追いつめたくなかったし……。」

「でも……このままにしてたら、いけないと思う。ちゃんと話して……みんなの誤解をとかなきゃ。」

広瀬くんは首をふった。

「転校してきたときから、自分はひとりでいようと思っていたから……。友だちはできなくてもいいって思ってたから。また、誰(だれ)かを傷つけることになったら困るからさ……。でも、みんなに責められたら、やっぱりつらくなって、つい学校を休んじゃったけどさ。だけど、もう大丈夫だから……。」

⑥「そんなの、ぜんぜん大丈夫なんかじゃないよ……。」

どうしても広瀬くんに伝えたかった。

「あのね……傷ついてつらい目にあうのは、広瀬くんだけじゃないよ……。クラスのみんなだって、同じようにつらい思いをするんだよ。だって、みんないい子なのに、それなのにクラスの友だちの悪口ばっかりいうようになって……。」

声が震え、まるで自分の声じゃないみたいだった。

（福田隆浩『香菜となつの秘密』講談社）

問い一、 ═ 線部Ⅰ「淡々と」・Ⅱ「自業自得」・Ⅲ「息をのむ」・Ⅳ「肩を落とし」のこでの意味として最も適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「淡々と」
ア　口ごもらずにすらすらと
イ　自分には関係がなさそうに
ウ　まわりくどくならずに
エ　気持ちをこめずにあっさりと

Ⅱ「自業自得」
ア　悪いことをすると悪い結果が返ってくる
イ　悪いことをしたのに良い結果が返ってくる
ウ　良いことをしたのに悪い結果が返ってくる
エ　良いことをすると良い結果が返ってくる

Ⅲ「息をのむ」
ア　息をおさえて静かにする
イ　驚いて思わず息を止める
ウ　緊張（きんちょう）して息苦しくなる
エ　不安で息ができなくなる

Ⅳ「肩を落とし」
ア　はずかしくなって
イ　気力を失って
ウ　気が楽になって
エ　がっかりして

問い二、 ── 線部①「わたし」とはだれですか。フルネームで答えなさい。

問い三、 ── 線部②「そんなの……無理だよ。できるわけないよ……。」とありますが、どのようなことを根拠（こんきょ）に、広瀬くんが降りることができないと言えるのですか。具体的な数字を挙げながら説明しなさい。

問い四、――線部③「それでも広瀬くんはしつこくいい続けた」とありますが、広瀬くんは何のためにうそをつき続けようとしたのですか。十字程度で答えなさい。

問い五、――線部④「無茶な頼み」とありますが、

(1) 「わたし」はどういうことを頼んだのですか。

(2) みんながそれを嫌がらずに手伝ってくれたのはなぜだと「わたし」は考えていますか。その理由を答えなさい。

問い六、――線部⑤「広瀬くんの声は震えていた」とありますが、それはどのような気持ちだったからだと考えられますか。本文中の言葉を使いながら答えなさい。

問い七、――線部⑥「そんなの、ぜんぜん大丈夫なんかじゃないよ」とありますが、なぜ大丈夫ではないと「わたし」は考えているのですか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア　広瀬くんが一人でいるのが好きだとしても、それではクラス全員でひとつにまとまることができないから。

イ　広瀬くんが登校できたとしても、それだけではクラス全員で仲良く過ごすことができないから。

ウ　広瀬くんがこれ以上だれも傷つけなかったとしても、クラスのみんなの心の傷はいえないから。

エ　広瀬くんが平気な様子で過ごしたとしても、クラスのみんなは広瀬くんと同じことで悩(なや)みつらい思いをするから。